様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ５ 月 １７ 日現在

機関番号：１３６０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2012～2015
課題番号：２４５２０４９８

研究課題名（和文）発想と表現からみる日本語談話の対照談話論的研究

研究課題名（英文）A contrastive study of Japanese discourse viewed through cultural attitude and language expression

研究代表者
沖　裕子（OKI, Hiroko）

信州大学・学術研究院人文科学系・教授

研究者番号：３０２１４０３４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,600,000円

研究成果の概要（和文）：依頼談話の発想と表現を、日本、中国で比較すると、社会文化、意識態度、談話内容、談話表現の４層すべてに異なりがみられた。日本語依頼談話は、最低限の希望事項のみを補文構造で表現しており、間接性が高く、相手の察しに任せる部分が多かった。依頼行為は人間関係の均衡を危うくし、相手に迷惑をかける、という意識態度に影響された結果だと考えられる。これに対して、中国語依頼談話では、希望を明確に伝える談話表現が産出されていた。依頼の応酬は人間関係を強化する好ましい行為だと考える、社会文化と意識態度に影響された結果だと推察される。

研究成果の概要（英文）：This research compared the development of request discourse in Japanese and Chinese from the perspective of the mode of thinking. The differences could be observed in terms of 4 layers: an actuality; an attitude; a macrostructure of information and an expression. The Japanese requests collected in the research included less information about what the speaker wanted and were expressed indirectly. This was explained as a consequence of the Japanese belief that request acts can risk damaging a relationship. Indirect expressions with less content are regarded as polite since they do not disturb the impression that people have a strong mutual respect for one another's feelings. For Chinese people, on the other hand, it was found that request acts have a more positive value insofar as they bind people together. Requests are therefore regarded as polite when clear and precise because this makes it easier for the listener to fulfill the request.

研究分野：日本語学・日本語教育学

キーワード：談話　発想と表現　依頼談話　日韓中対照研究　終助詞　文法体系

１．研究開始当初の背景

（1）日常的に使用されている表現の談話展開は、その文化が有している発想のしかたに支えられている。

（2）談話は、言語表現に閉じたものではなく、なぜそのような言語表現が生まれるのか、談話使用の背景にある発想をつきとめることが、談話研究にとって重要である。このことは、異文化理解との関連で、外国語および外国語教育の研究史上、指摘されつづけてきたことであるが、具体的な談話記述につながってはこなかった。

（3）発想と表現との関係を有効に記述説明できない限り、外国語母語話者が、母語母文化の干渉を無意識のうちに受け、不適切な日本語談話を使用して、人格的誤解を受ける不幸な事態はなくならないともいえる。

（4）談話は、社会文化、意識態度、談話内容、談話表現の４層が関係し、影響しあって実現しているという談話観に立った「同時結節モデル」を得るところまで、われわれの国際共同研究は進展していた。そこで、このモデルを用いて、対照談話論的に対照分析を進め、発想と表現の点から日本語談話の実態をとらえた記述を進めることが必要だと判断した。

（5）記述研究においても、音声、語彙、文法だけではなく、言語の最大の単位である談話の記述を進めることは、重要な課題となっている。

２．研究の目的

発想と表現の点から対照談話論的に日本語談話の特徴を記述するために、本研究は、次の３点を研究目的とした。

（1）談話記述のための方法論の開拓
（2）日本語談話の記述
（3）日本語談話の発想と表現に関する特徴の抽出

２．研究の方法

（1）談話記述の方法論の開拓のために、次の方策を用いた。

日本語談話の実態を外からとらえる日韓中対照研究を推進する一方、日本語談話の実態を内からとらえる方言談話の研究を推進した。そして、こうした内外の視点の接続（articulate）を模索することで、談話記述の方法論の多面的開拓につなげる工夫をした。

（2）日本語談話の記述のために、次のような方法を用いた。

依頼談話に焦点をあて、観察しやすいメール談話の具体例を採集した。そのうえで、内省をきかせながら、対照談話論的に分析を進めた。

日本語談話の記述のために、日本語談話、韓国語談話、中国語談話、および、日本国内の方言談話を対照させる方法をとった。これらの異同を比較することで、それぞれの談話的特徴を有効に引き出す方法を採用した。

国際共同研究を継続し、日本語、韓国語、中国語を母語とする日本語研究者が、それぞれの内省を活用できる体制を構築したうえで、共同討議につなげる方法を工夫した。

（3）日本語談話の発想と表現に関する特徴の抽出のために、次の方法を用いた。

談話の同時結節モデルを使用した。同モデルは、談話は、社会文化、意識態度、談話内容、談話表現の４層から結節されていくとする談話観に立脚したモデルである。発想と表現の特徴を効果的に抽出、整理する有効な枠組みとして採用した。

４．研究成果

（1）日韓中対照からみた日本語談話の特徴

① 依頼談話をとりあげ、特に中国語依頼談話と日本語依頼談話が、発想と表現の点で、次のように異なっていることを明らかにすることができた。

② 日本語社会では、共同体の一員として自身の位置をわきまえつつ助け合う互助関係を構築する社会文化であるのに対して、中国語社会では、個人間で積極的に依頼しあってお互いの情と紐帯を深めていくグァンシーと呼ばれる互恵関係を構築する社会文化があることがわかった。

③ こうした社会文化によって、日本語社会では、個人間の私的依頼は、共同体での相互の対人距離の均衡をやぶり、相手に迷惑をかける行為であると捉えられているのに対し、中国語社会では、グァンシーがあれば私的依頼の交換は当然のことであると感じられているばかりか、個人間の情を深めるよい手立てになると、積極的な価値づけがなされていた。

④ そして、こうした社会文化と、それによって形成される依頼行為に対する意識態度の異なりに応じて、次のような談話内容と談話表現の異同がみられた。

⑤ 日本語談話では、場面における自他の文脈をよくわきまえ、省略できる内容はできるだけ省略し、相手の行為を指定しないことがていねいであると感じられていた。これに対して、中国語談話では、相手がこちらの依頼内容を実現しやすいように、はっきりと述べることがていねいであると感じられていた。このように、ポライトネスのありかた自体に差異がみられたことは、特筆すべきことである。

⑥ 日本語談話では、表現面でも、できるだけ間接的表現を用いて相手への指図を避け、授受表現を使用して状況的に述べ、迷惑をかけて申し訳ないという気持ちの表現と、定型的挨拶表現を用いて表現していた。それに対して、中国語談話では、依頼の希望、条件、経緯を明確に言語化したうえで、相手に選択の余地を与える表現や、面子を立てる表現を添えてやわらげながら表現していた。

⑦ こうした日中談話の異なりによって、負の母語干渉（負の転移）が起こっていたといえる。負の母語干渉は、語や文法だけではなく、談話レベルでもおきることはあまり知られていないが、本研究においては、その具体的な指摘につなげることができた。日本語教育方法への応用にも、直接つながる成果であったといえる。

⑧ 韓国語依頼談話は、中国語依頼談話と共通する特徴とともに、日本語依頼談話とも共通する特徴が認められた。日韓の談話的差異をさらに明確に指摘するためには、社会文化、意識態度の層の異同だけではなく、言語体系そのものに起因する発想と表現の異同にも着目する必要があることが、課題として明らかになった。

（2）方言談話からみた日本語談話の特徴

① 談話レベルの表現は、言語体系のしくみにも左右される。特に文法と談話の相互的影響については、これまで研究も少なく、進めるべき課題である。

② そこで、研究代表者の母方言である、長野県松本方言を対象に、文法と談話の相互的影響を分析考察していった。意味も関与した言語の自律的体系性に関する研究課題は、母方言を対象とすることが方法的にも有効である。

③ 終助詞は、話し言葉である談話で多く使用されるばかりではなく、終助詞を用いずに話すことは、困難だとさえいえる。そこで、終助詞を対象に、①について分析を行っていった。

④ 表現法調査における推量表現の調査場面で、「明日は、雨カナ。」「明日は、雨だヨネ。」のような終助詞を用いた表現が回答される事実に注目し、松本方言の内省による意味分析をおこない、語義、文意、談話表現的意味の３レベルを分別しつつ記述することによって、その理由を指摘した。

⑤ 終助詞は、意味的には文副詞と同様に命題Ｐに対する心的態度をあらわし、連接する場合には、「〔Ｐ：〔Ｐ：明日は、雨〕カ〕ナ〕」というように、前出の終助詞節に対してさらに心的態度を加える構文をとる。「明日、雨カナ」で例示すると、カで＜命題 Ｐ（明日、雨）に対する疑い＞が示され、ナで、＜命題 Ｐ（明日、雨カ）に対し考慮中＞であることが示される。語義と文意は抽象的に記述され、文意は、命題Ｐに対する疑いを考慮中であることしか示さない。この終助詞文が、実際の場面で推し量りの意図をもって発話されたとき、談話表現の臨時的意味のひとつとして≪推量≫に解釈される。

⑥ 次に、松本方言終助詞の主要な形式を網羅し、形態、意味、構文の点から記述を行った。終助詞とは、文の末尾に位置して文を完結させる働きをもつ倚辞の一群を指す。終助詞は相互承接が可能であるため、相互に排他的関係をなさない。

⑦ 前接形式から整理すると、概略、名詞に接続でき、かつ活用語終止連体形にも接続できる終助詞（ダ、カ、サ、セ、ズラ、ジャン、ジャネー、ドー）であるＡ類と、名詞には接続できないが、活用語終止連体形に接続できる終助詞（ン、モン、イ、ワ、ゾ、コト、デ、ニ、ガ、ジ、ッテ、ッテバ）であるＢ類、名詞には接続できないが、活用語終止連体形と動詞命令形／連用命令形に接続できる終助詞（ヨ、ネ、ナ、ヤ）であるＣ類がみられる。後接形式から整理すると、必ず他の終助詞を後接する形式、他の終助詞を後接しうる形式、終助詞を後接できない終助詞に大別された。

⑧ また、意味的には、話し手の（1）命題に対する評価のしかたと、（2）命題を相手に対して伝えるしかた、という２種のモダリティーを有している。構文的には文末に位置するが、（1）の意味のありかたからみて、文副詞と類似の

機能を有している。本論で記述した終助詞の文法体系は、松本方言の表現法を論じる上での基礎となっていく。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計６件）

① 沖　裕子、松本方言終助詞の文法体系：談話研究の基礎、信州大学人文科学論集、査読有、２巻、2015、pp.233-250
https://soar-ir.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=516&item_no=1&page_id=13&block_id=45

② 沖　裕子、談話論からみた命令表現、日本語学、招待論文、第 33 巻第 4 号、2014、pp.14-22

③ 沖　裕子、談話種変換からみた日本語談話の特徴―わきまえ・察し・見立て・仕立て―、明海日本語、査読有、18 増刊号、2013、pp.223-237
http://www.urayasu.meikai.ac.jp/japanese/meikainihongo/18ex/default.htm

④ 沖　裕子、談話論からみた句末音調の抽出、国立国語研究所論集、査読有、５、2013、pp.77-94
https://www.ninjal.ac.jp/publication/papers/05/pdf/NINJAL-Papers0505.pdf

⑤ 沖　裕子、終助詞を用いた推量表現―談話論による松本方言の分析―、信州大学人文学部紀要『人文科学論集＜文化コミュニケーション編＞』、査読有、47、2015、pp.1-14
https://soar-ir.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=723&item_no=1&page_id=13&block_id=45

〔学会発表〕（計９件）

① 沖　裕子、基調講演 異文化理解と日本語教育：日中依頼談話の異同、2015 年異文化理解と日本語教育国際シンポジウム、2015 年 8 月 29 日、黒龍江大学、ハルビン（中華人民共和国）、招待講演

② 沖　裕子、談話論からみた依頼表現と要求表現、日本語教育国際研究大会、2014 年 7 月 11 日、シドニー工科大学、シドニー（オーストラリア連邦）

③ 沖　裕子、日本語依頼表現の特徴―ていねいな依頼とは何か―、2014 年３月１日、インドネシア日本語教育学会ジャボデタベック支部大会、国際交流基金ジャカルタ日本文化センター、ジャカルタ（インドネシア共和国）、招待講演

④ 趙　華敏、発想の相違による言語使用の影響について―中日・日中の翻訳を例に、第５回中日対照言語学会、2013 年 8 月 21 日、福建師範大学、福州市（中華人民共和国）

〔図書〕（計２件）

① 沖　裕子　他、ひつじ書房、柳田方言学の現代的意義―あいさつ表現と方言形成論―、2014、399Pp.(pp.125-142)

② 沖　裕子　他、国立国語研究所、大規模方言データの多角的分析　成果報告書―言語地図と方言談話資料、2013、183Pp.(pp.33-58)
http://www.lajdb.org/daikibo_hougen_data_doc/daikibo_hougen_data_rep001.pdf

〔その他〕
ホームページ等
http://www.shinshu-u.ac.jp/faculty/arts/prof/oki_1/

６．研究組織

(1)研究代表者
沖　裕子（OKI, Hiroko）
信州大学・学術研究院人文科学系・教授
研究者番号：30214034

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
西尾　純二（NISHIO, Junji）
大阪府立大学・人間社会学部・教授
研究者番号：60314340

（4）海外研究協力者
姜　錫祐（KANG, Suk-Woo）
韓国カトリック大学・東アジア言語文化学部・教授

趙　華敏（ZHAO, Huamin）
北京大学・外国語学院・教授